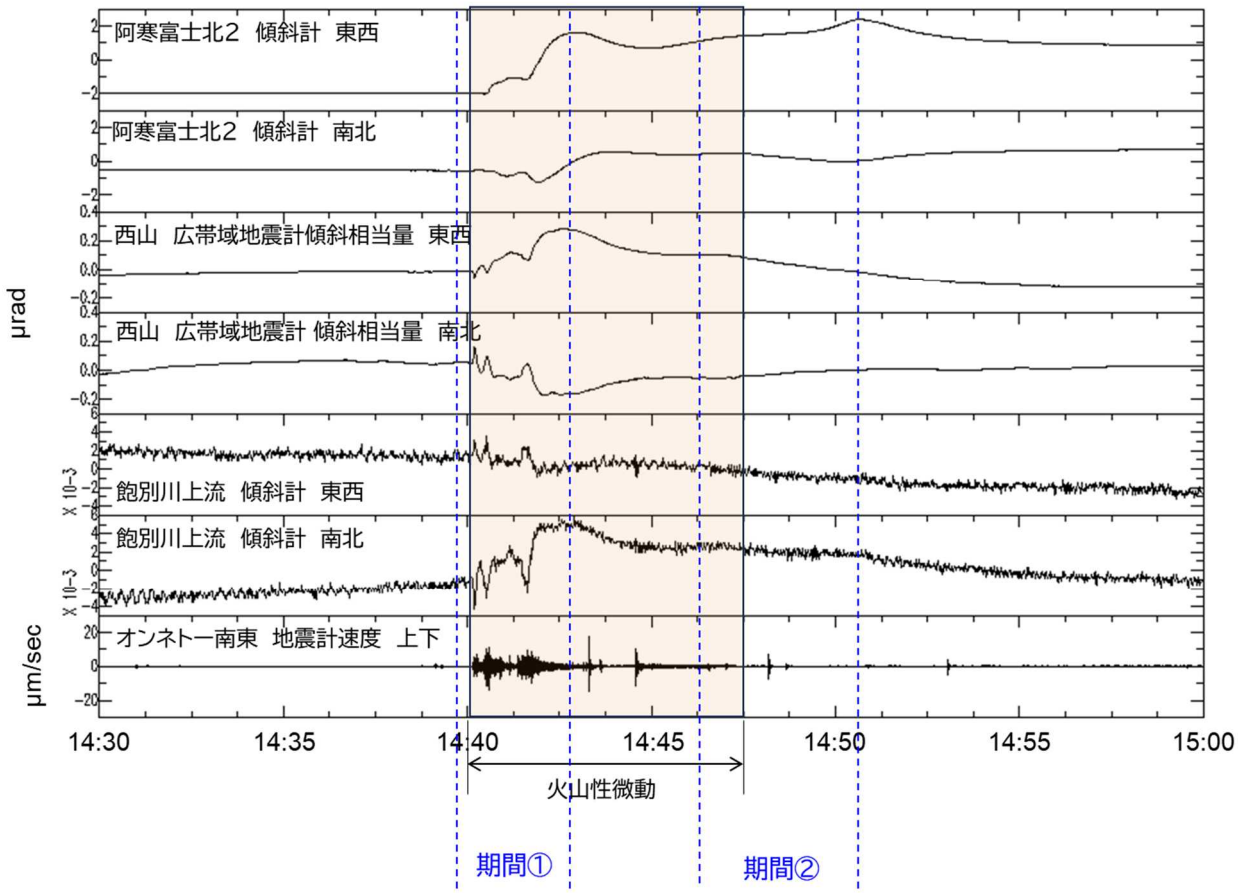
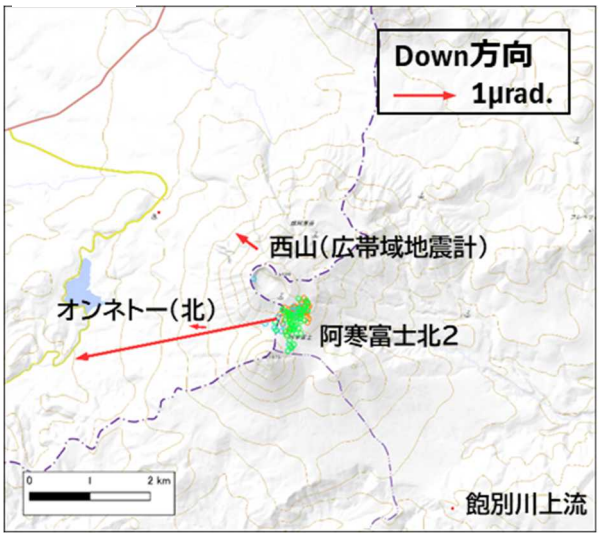


期間①



期間②

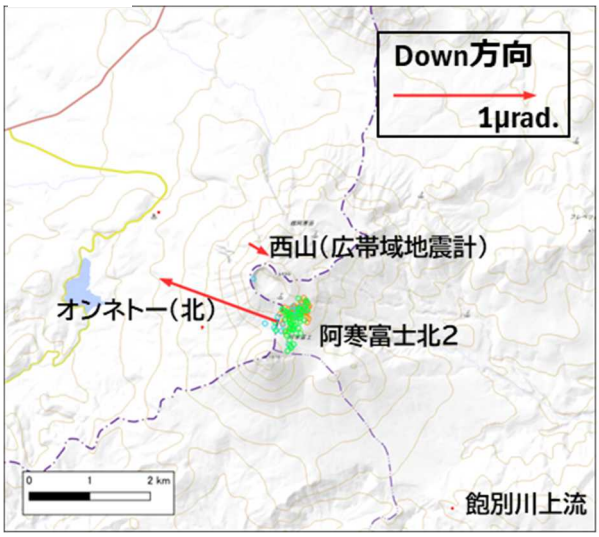
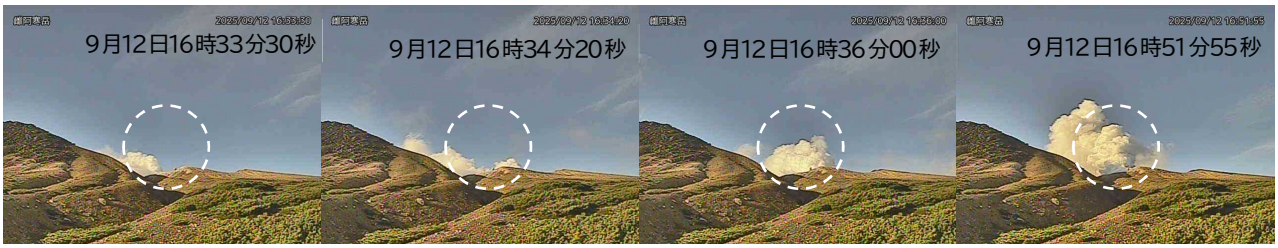


図５　雌阿寒岳　2025年９月12日14時40分頃に発生した火山性微動と傾斜変動

○：９月11-12日の火山性地震、火山性微動の震動源の推定位置です。シンボルの色は図2-1に示したものと同様です。

・12日14時40分頃から約７分間の火山性微動が発生し、同期して、主に火口近傍の傾斜計及び広帯域地震計で、火口方向が上がる傾斜変動を観測しました。
・傾斜変動過程の全体を通じ阿寒富士北２での変化が卓越し、ポンマチネシリ火口の南東側付近浅部での地殻変動を観測したものと考えられます。
・火山性微動の前半部（期間①）では火口方向上がりで放射状の変動が認められ、膨張を示唆すると考えられます。後半部以降～14時50分頃（期間②）は、各観測点の変動量や変動極性の関係性が異なっており、開口クラック的な解釈も考えられる変動が認められています。

① 火口カメラ



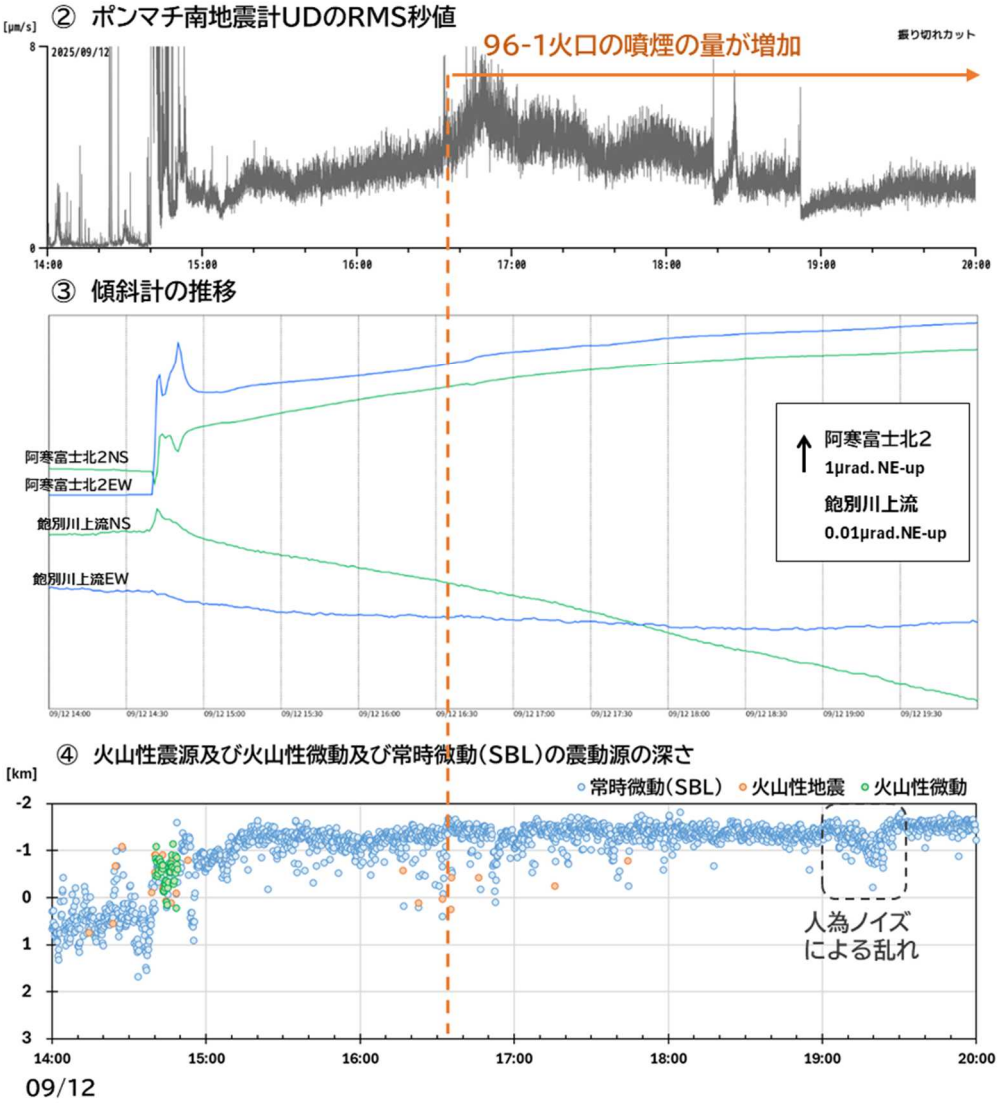


図６　雌阿寒岳　９月12日の火山性微動前後から96-1火口の噴煙量の増加前後のデータ推移
③は阿寒富士北２と飽別川上流で振幅倍率が100倍異なります。
④は相対ASL法による（図2参照）、ただし常時微動の震源の深さは、常時微動の減衰等の波動特性が弾性波と同様であることを仮定して計算したものです。

・火山性微動及び傾斜変動の発生後、96-1火口に近いポンマチ南観測点で最も明瞭に常時微動レベルが高まり、阿寒富士北２の傾斜計で火口方向傾向が続くなど、96-1火口ごく浅部の活動が高まりました。
・常時微動レベルは次第に高まり、16時34分頃に96-1火口内の別の場所からも噴気が上がるようになり、以降、噴煙の量が次第に増加しました。

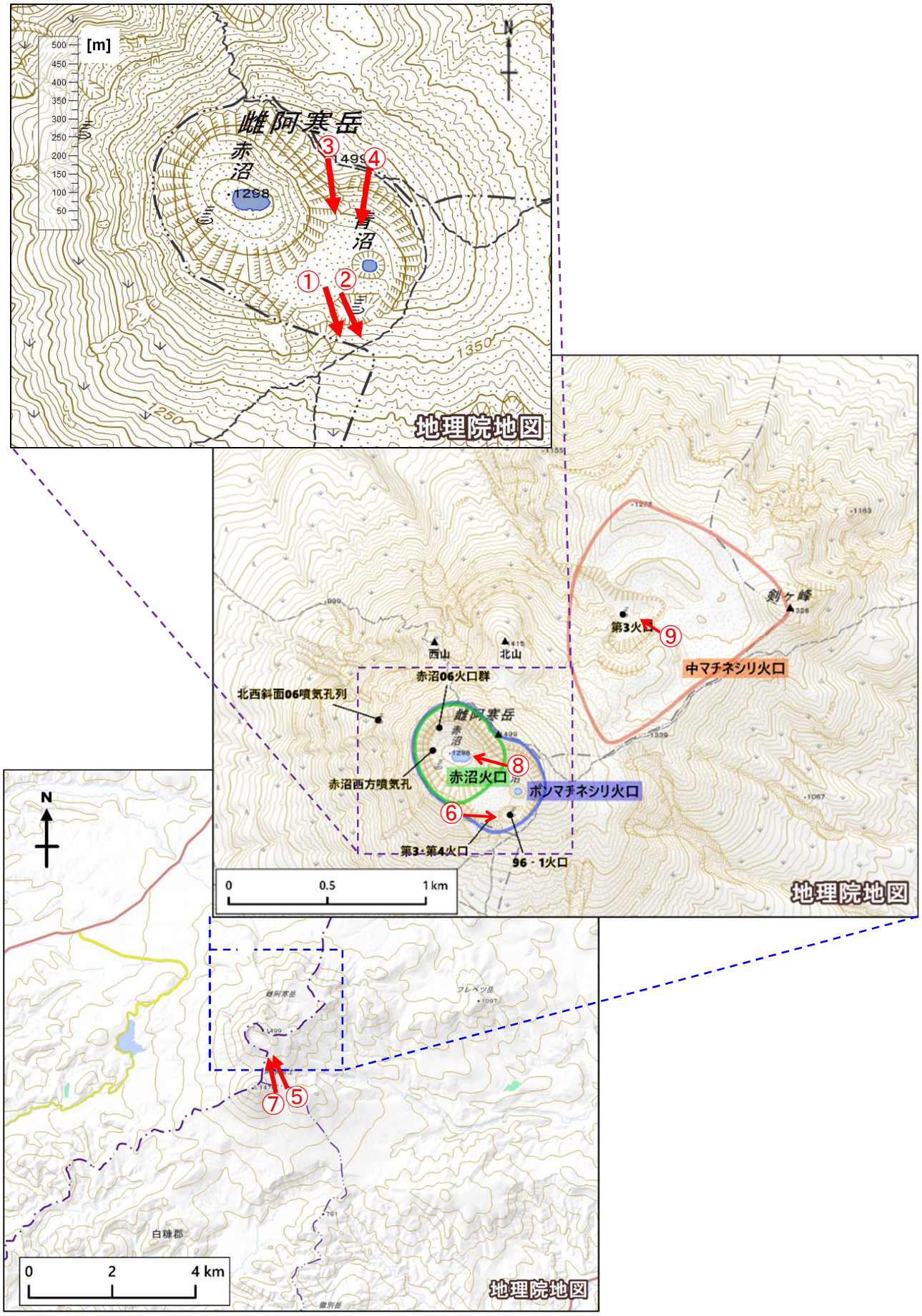


図７　雌阿寒岳　火口及び噴気孔の位置図及び写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）
各火口の火口縁は、概ねの範囲を示すものです。

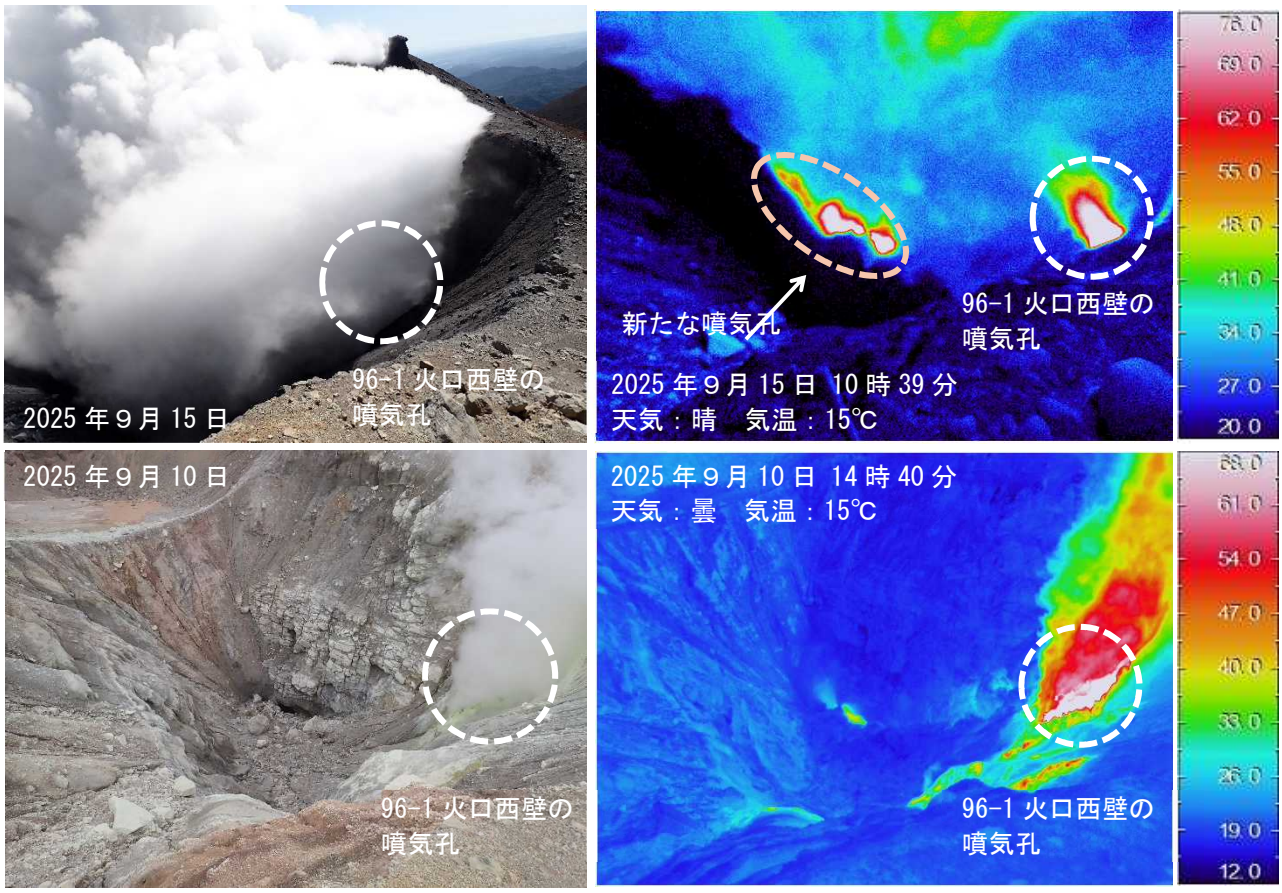


図８　雌阿寒岳　赤外熱映像装置によるポンマチネシリ 96-1 火口の地表面温度分布
上：図７の①から撮影、下：図７の②から撮影

・15 日には、10 日と比べて 96-1 火口の中に新たな噴気孔が形成され、複数の火口から活発な噴気活動が認められるようになっていました。

図９　雌阿寒岳　ポンマチネシリ火口内の状況及び火口近傍に堆積した火山灰の様子
上左：図７の③から撮影、上右：図７の④から撮影、下：火口近傍に堆積した火山灰の様子

・ポンマチネシリ火口内及びその近傍にごくわずかな火山灰の堆積を確認しました。

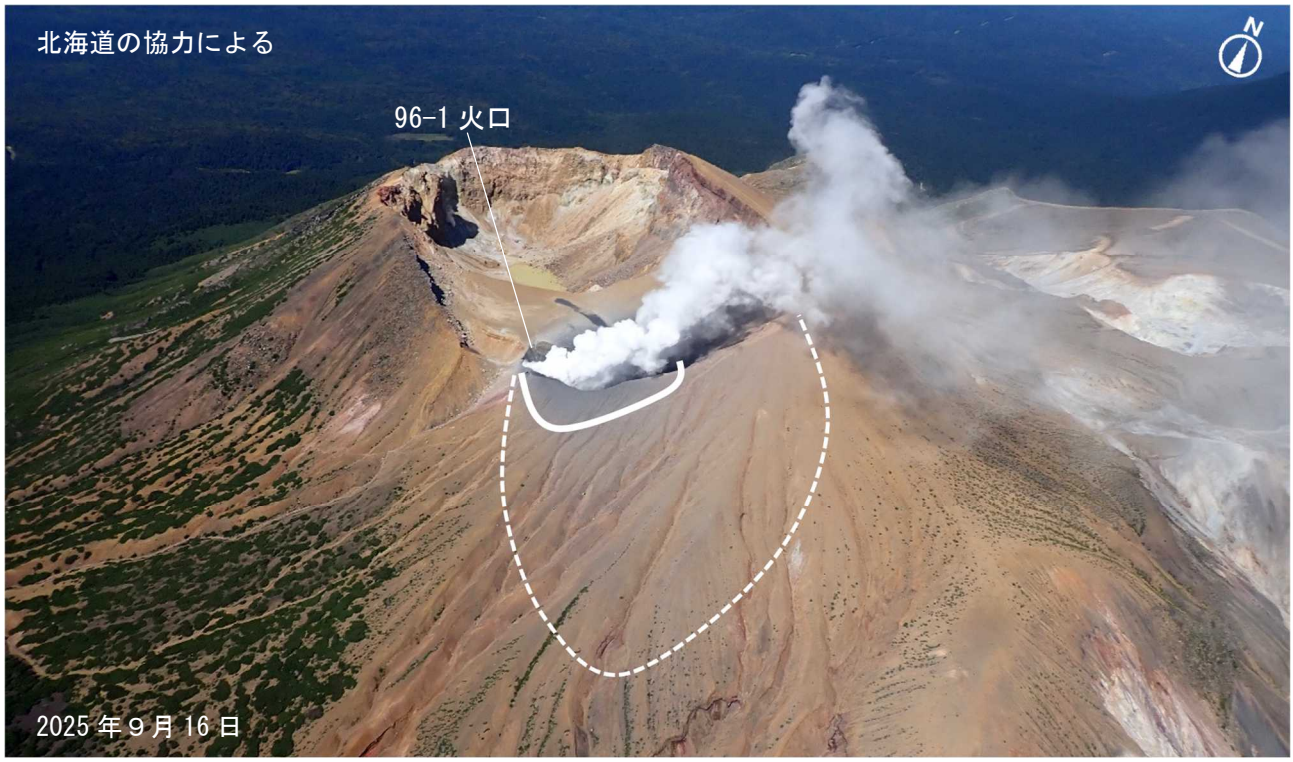


図 10　雌阿寒岳　ポンマチネシリ 96-1 火口周辺の状況
南東側上空（図７の⑤）から撮影
白実線：火山灰の堆積が明瞭に認められる範囲　白破線：火山灰の堆積が薄く広がっている範囲

・ポンマチネシリ火口内及びその近傍と南東から東にかけての方向に降灰が確認されました。

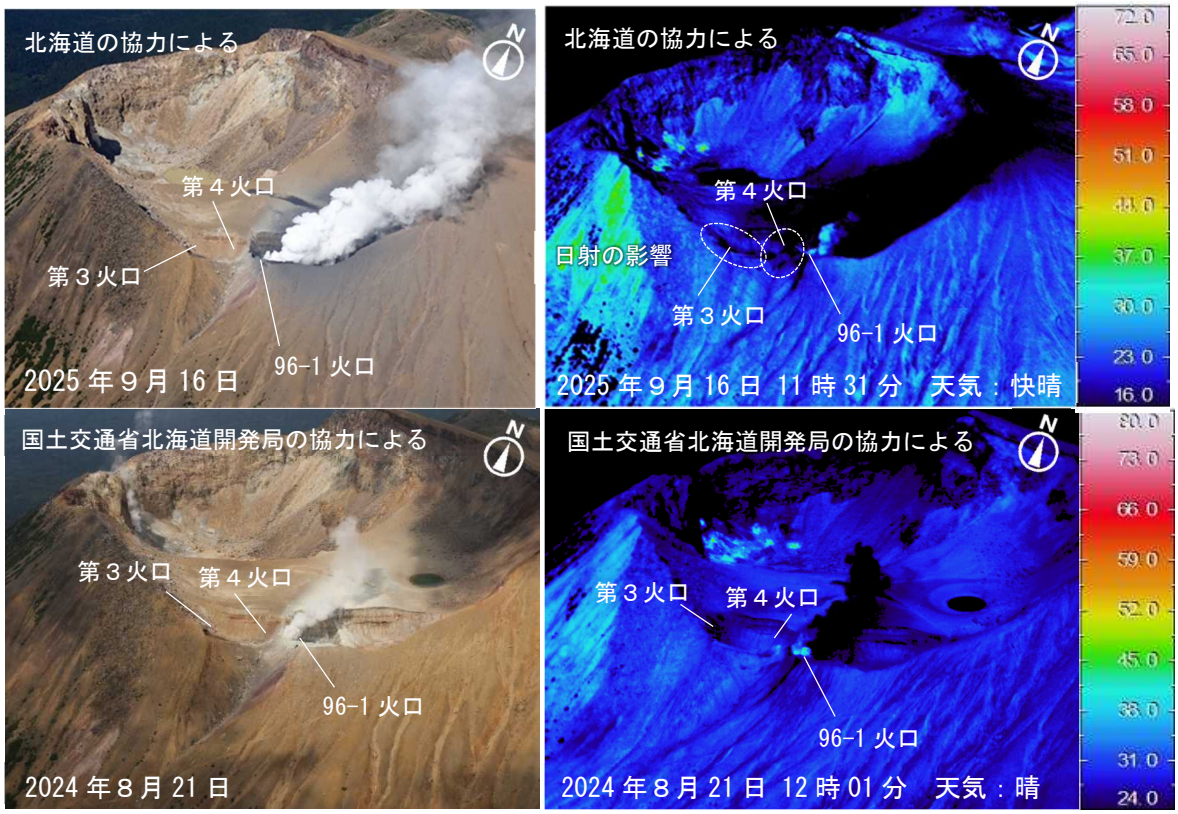


図 11　雌阿寒岳　赤外熱映像装置によるポンマチネシリ第３、第４火口の地表面温度分布
南東側上空（図７の⑦）から撮影

・９月 16 日の観測では、96-1 火口近傍に火山灰の堆積を確認しました。
・９月 15 日の現地調査と同様に、昨年の観測と比べて第４火口内の地熱域が縮小していました。

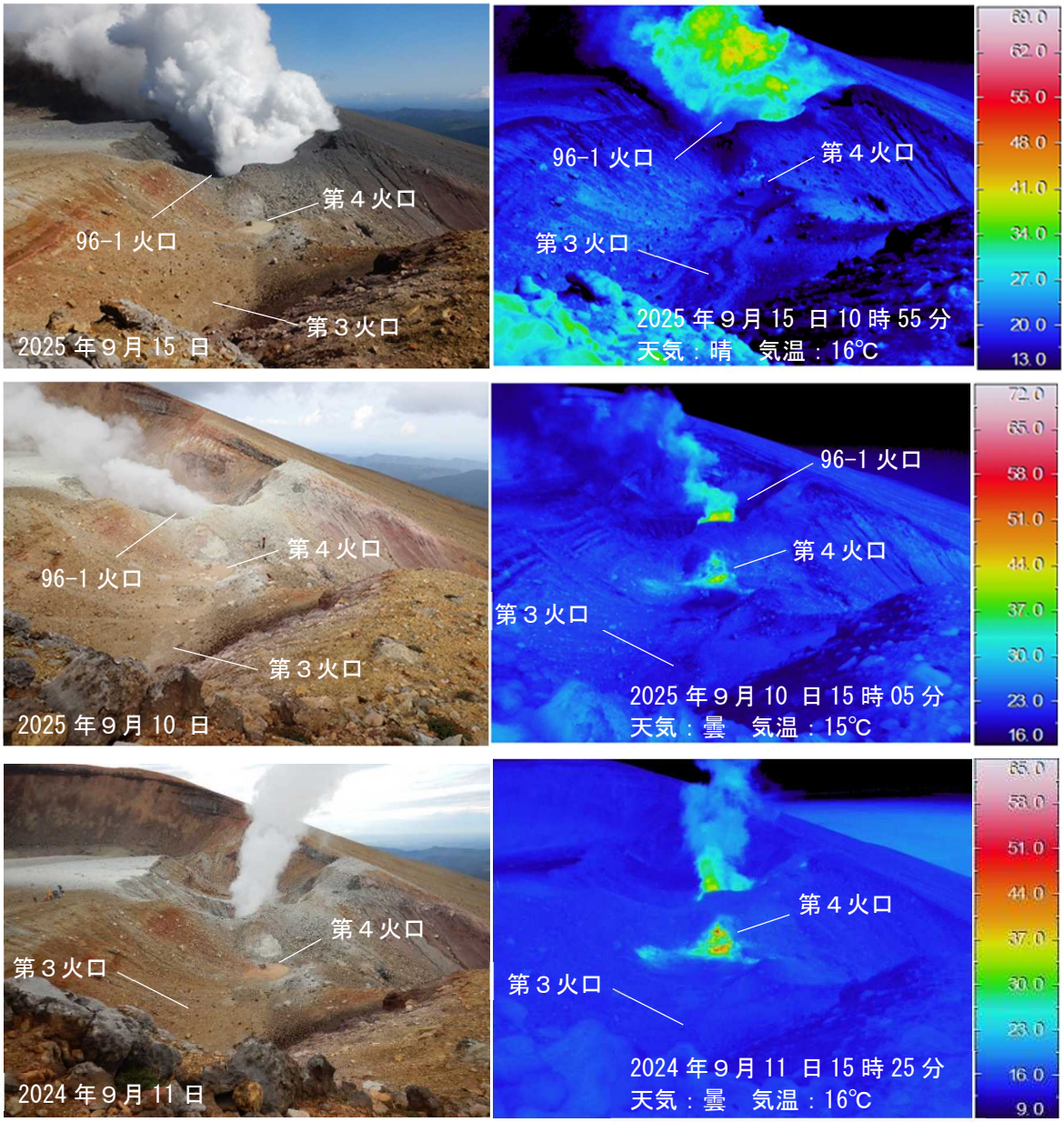


図 12　雌阿寒岳　赤外熱映像装置によるポンマチネシリ第３火口及び第４火口の地表面温度分布
西側（図７の⑥）から撮影

・９月 15 日の観測では、昨年及び９月 10 日の観測と比べて第４火口内東側及び北側の地熱域が縮小していました。この変化の原因については、火山活動状況の変化による影響のほか、９月 13～14 日頃にかけての降雨が影響している可能性も考えられます。

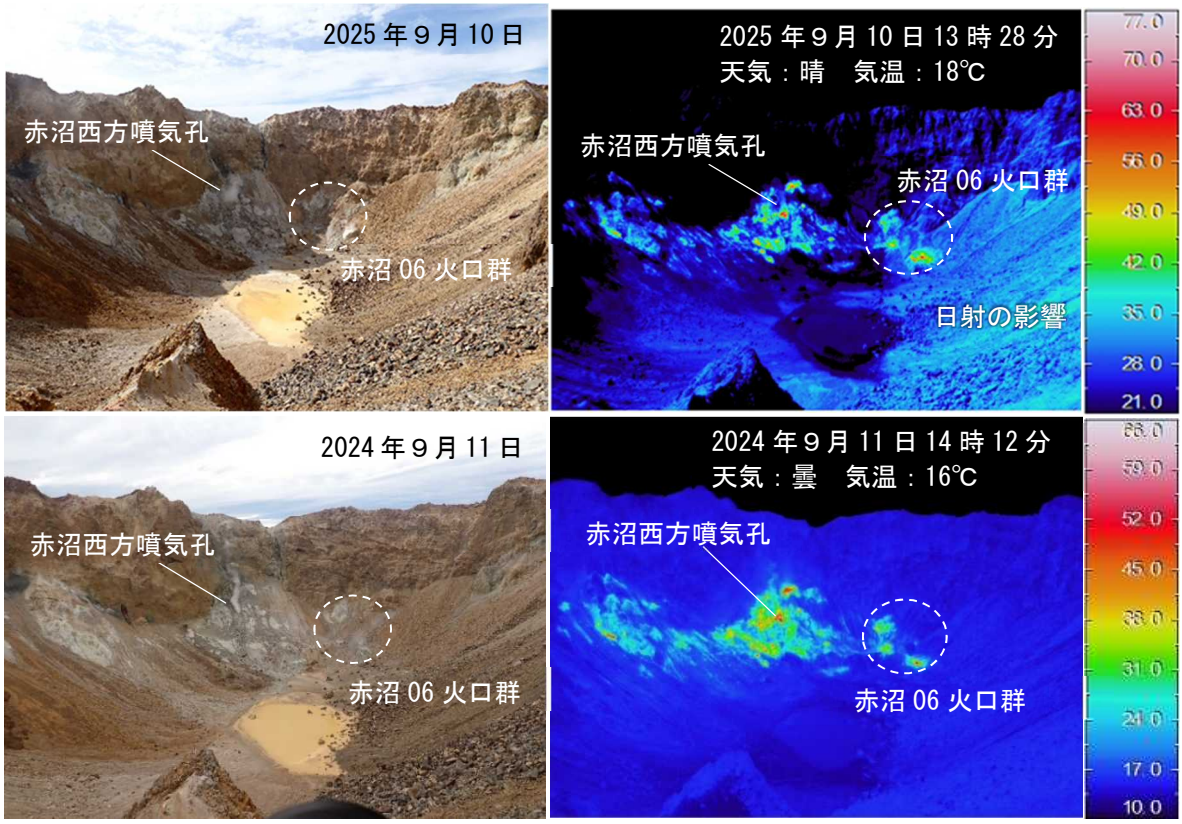


図 13　雌阿寒岳　赤外熱映像装置による赤沼火口の地表面温度分布
東側（図７の⑧）から撮影
・地表面温度分布に特段の変化は認められませんでした。

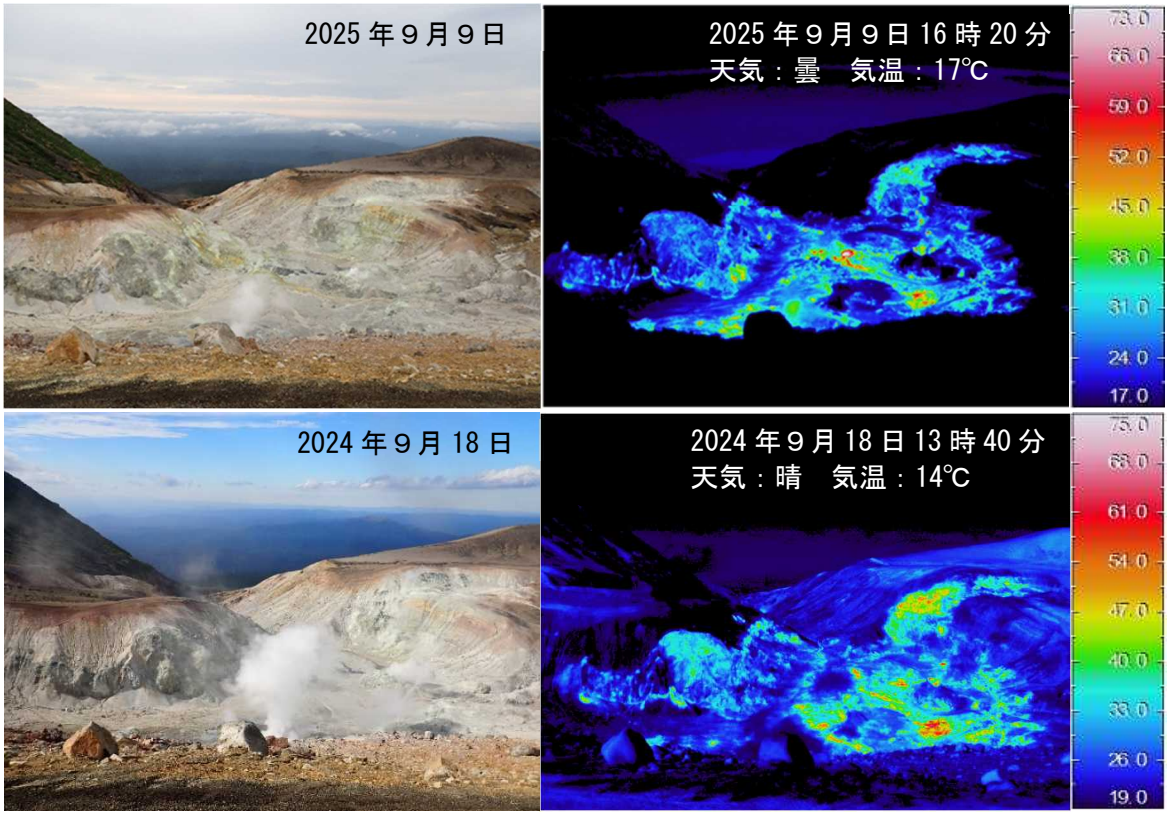


図 14　雌阿寒岳　中マチネシリ火口の地表面温度分布
東側（図７の⑨）から撮影
・火口内の熱泥の湧出や噴気の状況にわずかな変化はあったものの、熱活動の活発化を示すような特段の変化は認められませんでした。